大正末期から昭和初期にかけて岐阜地区の熊にまつわる話

『岐阜区開基百年記念史　闘墾』からの抜粋

（略）入植当時の地区内には、熊や狐、鹿などが横行していた。特に熊は猛獣といわれており、何よりも脅威だった。牛馬を襲い、人を脅かした例は枚挙にいとまがない。

大正13年３月、藤吉伊作宅裏の沢の中に熊が入り、部落総出で熊追い。人の歓声に驚いた熊は坂を上がり東南方向の林の中に逃げ込むべく走ったが、その方向に家のあった島きくよという女性が「家に子どもを寝かしてある」と叫ぶと、熊の正面めがけて突進した。熊はこの勢いに恐れて南西方向の森めざして逃げたが、母性愛の強さに皆驚いた。

昭和８年頃の夏、集乳所を建てる場所を実測中の時、山から熊が迷い出て、研修所付近から高台の南側の斜面の林に逃げ込もうとしたが逃げ込めず、山麓を説教所（久世・梅田の境）の付近をさまよい、つないであった馬の側を通ったが、馬には何もせず、カボチャ畑に入ってカボチャにつまずき、大きなカボチャに爪痕を残して山腹の疎林の中に逃げ込むという喜劇を演じた。熊が地区の中央を１周し、カボチャ１個に爪痕を残しただけで何もせず、林の中に逃げ込んだのは前代未聞のことだった。